

令和元年6月13日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02484

研究課題名(和文) 韻律構造類型としての西南日本の語声調

研究課題名(英文) Southwestern Japanese lexical tones as a prosodic type

研究代表者

児玉 望 (KODAMA, Nozomi)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(文)・教授

研究者番号：60225456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語諸方言のアクセントの系統関係を、構造主義的な観点から再検討した。日本語のアクセントは、本州・四国・九州東部に主として分布する位置アクセント体系と、九州西南部や琉球諸島を中心に分布する語声調体系に大別できる。両者は共通の祖形をもつことが知られている。本研究では、位置アクセント体系が、語声調体系の祖体系から改新によって派生した共通の祖形をもつことを示し、近畿・四国ではさらに語声調的な体系へ向けた改新が起きた、としてアクセント史を説明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、琉球諸方言の記述研究が進み、日本語史の見直しが進められている。本研究は、アクセント史の分野においてこれらの研究成果を視野に、方言アクセントの分布をアクセントの構造的変化の結果として説明するものである。平安期の京都アクセントが古形に近く、琉球を含む全国のアクセントがこれから派生したという通説に代わり、日本語アクセントの系統分化が、日本語が列島に広がる以前に九州ではじまった、という解釈を許す新説となっている。

研究成果の概要(英文)：The present author thoroughly revised the genealogy of accent systems of Japanese dialects from a structuralist perspective. Japanese prosodic systems are classified into two types. Pitch accent dialects are distributed in Honshu, Shikoku and Northeastern Kyushu while lexical tone systems are predominant in Southeastern Kyushu and the Ryukyu islands. Correspondences in prosodic classes indicate that the two types are cognate. The author demonstrates all the pitch accent systems in Honshu and Shikoku are offshoots of a single proto-form, which was an innovation from an earlier lexical tone system. Kinki and Shikoku systems are shown to be further innovations toward lexical tone systems, rather than archaic forms as previously imagined.

研究分野：言語学

キーワード：アクセント 語声調 アクセント核 系統仮説

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

西南日本のアクセント体系は、1910年代に長崎方言を分析したポリワールフ以来、東京方言のような位置アクセント体系とは異なる類型であることがたびたび指摘されてきた。現代のアクセント研究では、1970年代に提唱された、上野善道氏の「N型アクセント」類型、早田輝洋氏の「語声調」類型が広く受け入れられている。位置アクセント体系では語の音節数に応じて弁別的な位置の区別が増えるのに対し、後者の体系では語の音節数に関わらず型の数が一定であり、かつ、音節数の違う型の間にそれぞれの型が系列を形成している、という位置アクセントには見られない特徴がある。

一方、琉球諸方言のアクセント記述研究が進み、松森晶子氏が琉球アクセントの祖体系として音節数に関わらない3つの系列が再建できることを提唱した。また、松森氏・五十嵐陽介氏により、先島諸島諸方言のようにこれらの系列が連文節環境でのピッチ形の違いとして実現する、位置アクセント体系とは大きく異なる体系が存在することが報告されている。

日本語の祖体系としては名義抄の声点資料に記録されたものに近いものが再建できる、とする金田一春彦氏の説が通説となってきたが、服部四郎氏により指摘された名義抄式体系では説明のできない琉球諸方言における型の分割をはじめとして、日本語アクセントの祖体系とこの系統分化の過程を、これらの琉球諸方言アクセントからの知見を加えて再検討することが急務となっている。

2. 研究の目的

- (1) 日本語アクセントの祖体系として位置アクセントを再建すべきであるか、系列性をもつ体系として再建すべきか、という問題としてアクセント史を捉え直し、これに解答を与える。
- (2) 位置アクセント体系における無核型(無アクセント型)が語声調にほかならない、とする川上泰氏の知見に基づき、再建されるアクセント変化を、位置アクセントがどのように発生するか、位置アクセントをもつ型がどのように無核型となるか、位置アクセントがどのように変化するか、という観点からまとめ直す。
- (3) 日本語の方言アクセントが「音法則」的な対応関係をもっていることは、これらのアクセント変化が無自覚な変化として進行したことを示している。これを可能にするような異音的な音声変化とこれに伴う構造変化という形で、「アクセントの山の移動」や「連低類の高起化」といったアクセント史研究で既知のものを含む再建アクセント変化に、構造主義的な説明を与える。

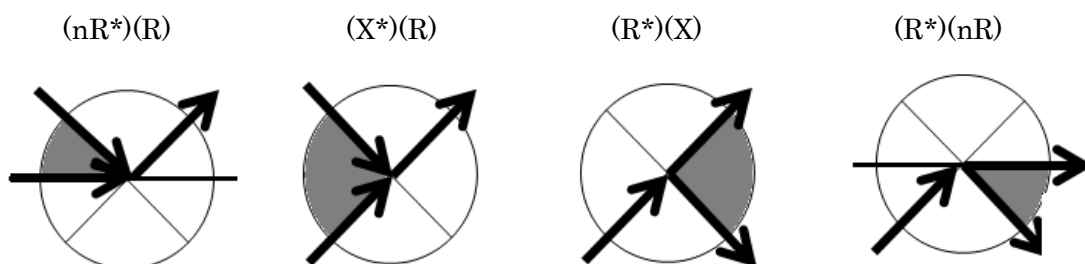
3. 研究の方法

語声調類型は、複数の無核型が対立する体系であるとみることができ、無核型の実現形は「位置アクセント」のような環境に左右されない特徴をもたず、文脈に応じた変異形をもつことを考慮し、公刊されたものを含む自発談話音声資料としてアクセント分析を行なう。

位置アクセントの構造解釈としては、上野善道氏により提唱された「上げ核」「下げ核」「昇り核」「降り核」の4分類を採用するが、「高(H)」「低(L)」の段階ではなく、「昇(R)」「降(F)」の曲調指定するもの、と規定し直すことにより、これらの核を、核音節と核次音節へのピッチ形の指定のあり方、として記述する。また、可変側の音節に、「X(無指定)」「nR(不昇)」「nF(不降)」を加えることにより、4つの核を「上昇/下降」と「上昇/下降・開始/完結」に分けた8つの類型に区分する。

	核音節	核次音節
上げ核(nR*)(R)	上昇してはならない	上昇を開始しなければならない
上げ核(X*)(R)	上昇してもよい	上昇しなければならない
昇り核(R*)(X)	上昇しなければならない	上昇してもよい
昇り核(R*)(nR)	上昇を完結しなければならない	上昇してはならない
下げ核(nF*)(F)	下降してはならない	下降を開始しなければならない
下げ核(X*)(F)	下降してもよい	下降しなければならない
降り核(F*)(X)	下降しなければならない	下降してもよい
降り核(F*)(nF)	下降を完結しなければならない	下降してはならない

図1は、核音節と核次音節へのピッチ形がどのように指定されるかを模式的に示したものである。塗りつぶした部分は、可変部である。



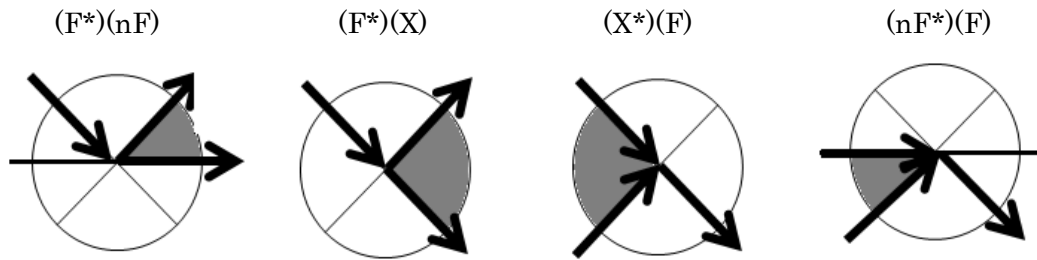


図 1

図 1 で上下及び左右に隣接する核は、それぞれ可能な音声的実現に重なりをもっており、音声的に同じものが弁別特徴の変化によって無自覚なまま構造を変える、という構造変化としてこれらの核の間の変化を仮定しようとする。

位置アクセント体系の変化としては、原則としてアクセント核の位置は動かず、上記のような構造変化によって、アクセントの種類が変わる、という考え方をとる。この根拠は、名義抄声点の体系は、上げ核体系と解釈すると外輪式体系と核音節の位置が同じになる、という木部暢子氏の説を根拠とする。この説では、通説で問題となる「逆周圈的」なアクセント変化の問題は解消する。

図 1 の左右に隣接する体系間の変化は、昇降のタイミング変化である。降り核⇔下げ核、上げ核⇔昇り核の変化がこれに相当する。通説の「山の一拍ずれ」もこの種の変化が想定できる。上下方向の変化は弁別特徴をおく音節の交替であり、上げ核⇔降り核、昇り核⇔下げ核の変化がこれに当たる。京都方言では文献資料において確認される「連低類の高起化」は、上げ核から降り核への変化だったと分析することができる。

図 1 の隣接で説明できないのが上げ核⇔下げ核、昇り核⇔降り核の変化である。祖体系が上げ核体系であったとすれば、現代位置アクセント方言の多数を占める下げ核への変化は、間に降り核か昇り核への変化のいずれかを経ていると見なければならない。

この名義抄=外輪式の核とその位置を、全国の諸方言の対応する型と比較し、これらすべての体系でどのように核が発生し、あるいは無核化したかを説明し、また、上げ核から下げ核への変化が想定される場合には、降り核と昇り核のどちらかを経ていたかについて考察することを試みる。

4. 研究成果

研究の目的(1)については、日琉祖体系は語声調体系的な系列性をもつ体系であったと考えなければならないことを、児玉(2017)では名義抄体系の動詞の系列性と、琉球諸方言で分割されている型と本土方言形の型の対応を根拠に、児玉(2019)では、全国のピッチアクセント方言にみられる不規則な無核の名詞ノ付き形が、ピッチアクセント体系以前の段階の系列性を示す語形の継承として説明可能であることを根拠に、それぞれ論じた。

この仮説では、琉球諸方言では系列性を保ったまま系列が 3 つに統合されたのに対し、本土のピッチアクセント体系は、曲調と平調の対立を失って系列が維持できなくなりピッチ変異の位置だけが対立するアクセント体系に変じた、と見る。後者の変化との相関が疑われるのは、「拍の等時性」の成立である。九州には、上げ核体系では説明できない位置アクセント体系や、琉球祖体系からとしてもピッチアクセント祖体系からとしても変化の再建が可能に見える二型アクセント体系があるが、児玉(2018b)では、このうち鹿児島方言では「拍の等時性」が成り立たず、音韻論上の長母音の長さが可変的であることを示した。児玉(2017)の結論は、日本語アクセントの系統分化が、日本語が日本列島全体に広がる前に九州で分岐を始めていた、と解釈することも可能な仮説であり、研究の継続が望まれる。

研究の目的(2)については、児玉(2017)と児玉(2018a)で論じ、児玉(2018a)では末尾に系統分岐図を掲載した。詳細についてはこれらの論文に譲るが、ここではこの論文以降に仮説に変更があった部分を中心に論じる。

児玉(2017)では、上げ核体系では無核低結式であったとみる 2-2 類・3-2 類が有核型となる中輪式・内輪式・中央式や周辺の諸体系に共通する特徴を、上げ核体系から降り核体系への変化に伴って、低結式の下降が語末音節に固定して実現する、という変化を経ていた諸体系でこの下降が降り核の下降と同一視されて有核化した、とみなした。しかし、児玉(2019)で論じたように、語末音節が低い型に無核付属語が高く接続した体系では、降り核化する以前にこの下降が上げ核の核音節と同一視されることがありうる。従って、これらの体系については、降り核化を経ないで 2-2 類・3-2 類が有核型となった可能性を検討しなければならない。

降り核化を経たことが文献によって実証される中央式のほか、上げ核体系で無核低結式であった 1-2 類が有核となる、という内輪式を特徴づける変化は、降り核化を経たと考えることでうまく説明ができる。また、内輪式に隣接する垂井式・中央式や、垂井式を地理的に分断する加賀式・福井三型両アクセントではいずれも共通して語頭核が無核化する変化を経ており、この結果、有核型全体が、降り核のピッチ形をそのままにして核の位置が 1 拍前にずれた下げ核体系となっている。このため、中央式において語末核型は、本来核ではない低結式の下降に由

来する型を除くと、次末音節が促音拍や無声拍といった特殊な環境のものに限られたアキマとなっている。このような語頭降り核の無核化・低起化は、先行して「高」をおけない発話冒頭では、語頭降り核を下降調を実現する核として維持することが困難であった、として説明する。一方、内輪式は、福井玲氏によれば高山で助詞の「も」が有核となることを含め、降り核の下降タイミングが一拍ずれて下げ核に変化した、という説明がうまく成り立っており、1・2音節語での語頭核の維持が、このような下げ核化により助けられた、とみることができる。

これに対して、中輪式については降り核化を経たとみなすべき積極的な根拠がない。1-2類は無核のままであり、また、中輪式の周辺には語頭核型（1-3類、2-4/5類）が無核化した体系が見当たらない。むしろ、隣接する外輪式と同様、上げ核が昇り核化を経てから、さらに下げ核化した、という可能性を検証する必要がある。上げ核体系から昇り核化を経て下げ核化したと考えるべき例が出雲方言である。外輪式に分類される出雲アクセントと、昇り核アクセントをもつ東北地方の外輪体系との共通点は、広戸惇・大原孝道両氏により早くから指摘されている。この共通点は、上げ核体系の上昇の早まりによる昇り核化が、語末核型から先に始まり、語頭・語中核では起きなかったことにより、非語末核では核の位置が一つ後ろにずれた、という説明ができる、2-3/4/5類の統合である。秋田方言など日本海側の東北昇り核方言では核次音節が狭い場合に非語末核も昇り核化して核が元の位置を保ったが、出雲方言では、核次音節が狭い非語末核のうち、低結式の下降が後続したと見られる2-5類のみに語頭核が残っている。出雲方言は現在は下げ核体系であるが、型の統合を見る限りでは先行段階に東北の体系と同様な昇り核化を仮定したほうがよい。

東日本の中輪体系は、新潟県に上野善道氏が外輪体系から中輪体系への連続的な分布を報告している点を考慮すると、昇り核から下げ核への変化が外輪・中輪の両体系に渡って進行した可能性を検証する必要がある。一方、西日本の中輪体系は、広島方言のように、下げ核体系において、核音節の前が低平となる体系が多く観察される。『全国方言資料』の中には、核の後の下降が聞き取れず、あるいは昇り核体系として分析する可能性があるのではないかと思われる資料（北宇和郡津島方言）もある。中輪方言体系の再検討の必要があるかもしれない。

図2に、児玉(2018a)掲載の系統図に以上述べた見解を反映した改訂を施したものを示す。

研究の目的(3)については、研究の方法で記した「核」の仮説を用いた系統図の作成が可能なことを示すことで、位置アクセント体系の変化については目的が達成されたと考える。

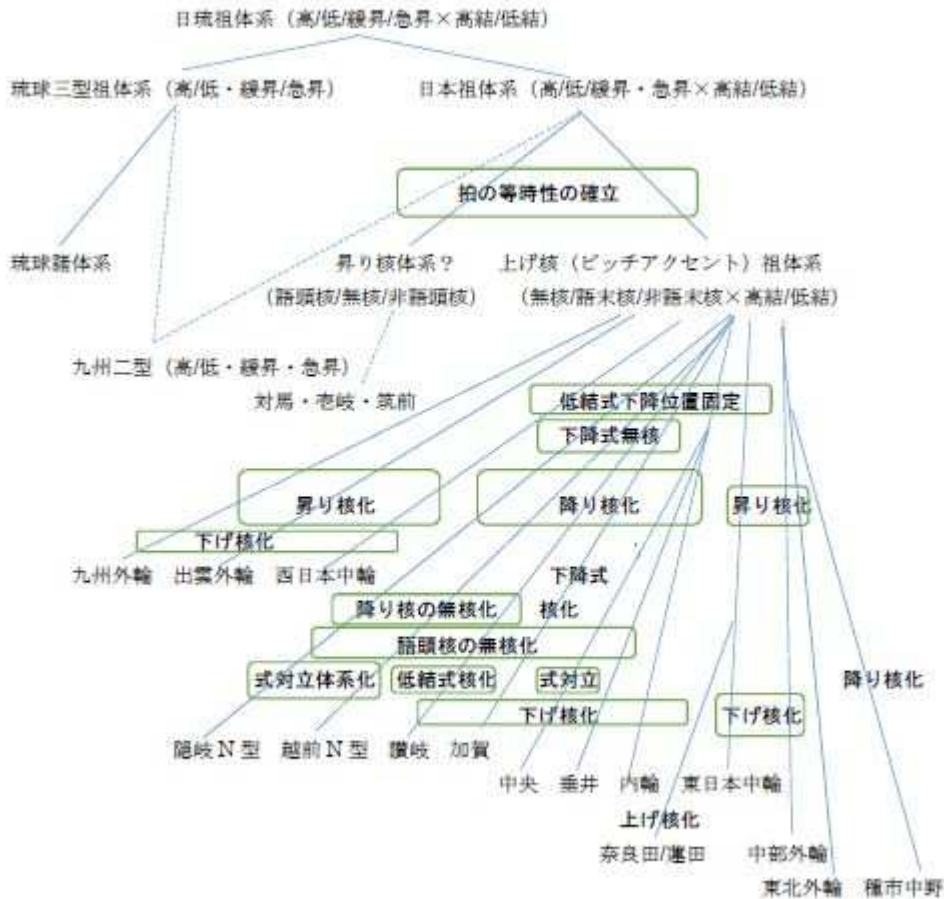


図2

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5件)

- ① 児玉望(2019)「無核ノ付き形のピッチアクセント方言への継承」『ありあけ 熊本大学言語学論集』査読無し 18 pp.29-80. <http://hdl.handle.net/2298/42084>
- ② 児玉望(2018a)「東北地方の二つの方言の韻律分析：「アクセント核はどこから来たか」補説」『ありあけ 熊本大学言語学論集』査読無し 17 pp.27-52. <http://hdl.handle.net/2298/39442>
- ③ 児玉望(2018b)「鹿児島方言の短い長母音」『ありあけ 熊本大学言語学論集』査読無し 17 pp.53-70. <http://hdl.handle.net/2298/39443>
- ④ 児玉望(2017)「アクセント核はどこから来たか」『ありあけ 熊本大学言語学論集』査読無し 16.pp1-34. <http://hdl.handle.net/2298/36781>
- ⑤ 児玉望(2016)「天草本渡二型アクセント—自発談話音声資料の分析」『ありあけ 熊本大学言語学論集』査読無し 15.pp59-82. <http://hdl.handle.net/2298/35221>

〔学会発表〕(計 2件)

児玉望「核はなくなるのか」日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」 2016.8.31

児玉望「日本語アクセントの下降開始に続くピッチ形」第29回日本音声学会全国大会 2015.10.3

6. 研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。